

財政再建の先送り

「男子の本懐」は、ライオン宰相と呼ばれた浜口雄幸が1930年に東京駅で撃たれた際に発した言葉だ。城山三郎さんが浜口らを描いた名作のタイトルにもなった。

核心論

29年に第27代首相に就任。緊縮財政や金解禁、ロンドン軍縮条約調印を押し進め、軍部や右翼の反感を買う。手術で命をとりとめたものの、回復を待たずに国会答弁に立ち、体調が悪

健全化へ道筋描き直せ

化、事件から5カ月後に退陣し、亡くなった。正義感の強い信念の政治家として知られる。

浜口狙撃から半世紀後、「財政再建を成し遂げれば、まさに男子の本懐だ」と訴えたのは、当時蔵相の渡辺美智雄氏。「増税なき財政再建」を公約にした鈴木善幸内閣で、「予算は有限、欲望は無限。財政再建というのは、心の再建にほかならない」と語りながら、その先頭に立った。

それから40年。基礎的財政収支の黒字化という財政健全化目標は、2020年度から25年度に先送り。さらに先日の内閣府の財政試算では、楽観的な経済成長率で推移しても29年度にずれ込む。にもかかわらず、

政権は「25年度」の目標を掲げ続ける。

確かに、新型コロナウイルス対策で超大型の補正予算を編成し、大量の国債発行で賄ったのはやむを得ない。ならば現実を直視した財政健全化の道筋を描き直すのが政治の使命だろう。

「眼前の利益のみに幻惑せられ百年の長計を忘れたならば国の前途は知るべきのみ」は浜口の言葉である。どこの家計でもやっているように、コロナ対策で支出が急増すれば、他の部分を切り詰めるのは当たり前。それが次の世代への責任ではないか。

財政状況についての率直な説明をしない気概なき政治家には、まず心の再建が必要なのかもしれない。